

## 成川遺跡第4次2022年発掘調査速報

### A Prompt Report of the Fourth Excavation on 2022 Season at Narikawa Site, Kagoshima

竹中 正巳<sup>1)</sup>, 大西 智和<sup>2)</sup>, 鐘ヶ江 賢二<sup>3)</sup>, 松崎 大嗣<sup>4)</sup>, 中摩 浩太郎<sup>4)</sup>, 新垣 匠<sup>4)</sup>

Masami Takenaka, Tomokazu Onishi, Kenji Kanegae, Hirotsugu Matsuzaki, Kotaro Nakama, Takumi Arakaki

<sup>1)</sup> 鹿児島女子短期大学, <sup>2)</sup> 鹿児島国際大学国際文化学部, <sup>3)</sup> 鹿児島国際大学ミュージアム, <sup>4)</sup> 指宿市教育委員会

本稿は、2022年8月19日から9月7日まで行われた鹿児島県指宿市成川遺跡の第4次2022年発掘調査の調査結果速報である。新たに1基の土壙墓が検出された。

**Keywords** : Narikawa site, protohistoric Kofun period, human skeletal remains, menhir, Yayoi period

**キーワード** : 成川遺跡, 古墳時代, 古人骨, 立石, 弥生時代

## 1. はじめに

成川遺跡（なりかわいせき）は、薩摩半島南端部、鹿児島県指宿市山川成川に所在する（図1）。弥生時代中期から古墳時代の埋葬遺跡である。また、南九州の弥生・古墳時代土器様式である「成川式土器」の標式遺跡として知られる。

成川遺跡は、1957年から1985年までに実施された3回の発掘調査（第1次～第3次調査）によって、300体を超える人骨に加え、おびただしい数の鉄製の刀や剣、土器などが見つかっている（河口ほか、1958；田村編、1974；鹿児島県教育委員会、1983）。

薩摩半島南端にある成川遺跡の人骨の形質は短頭・低顔・低身長を示し、本土集団とではなく、南西諸島の先史時代人と共通する特徴を多く持つと指摘されている（内藤、1985）。南九州の人類史を解明する上で、この古墳時代の南九州内に認められる形質差は何によるのか、興味が持たれてきた。解明の鍵になる成川遺跡から出土した人骨は保存状態が悪く、形質の再検証や最先端のDNA分析が行える状態のものは存在していない。生活誌の研究なども全く行われていない。そのため、南九州の人類史を解明する上で、解明の一つの鍵になる成川遺跡から保存のよい人骨の検出を目指し、竹中正巳らは、2019年から成川遺跡の新たな発掘調査（第4次調査）を開始した。

2019年発掘の調査成果としては、遺跡の範囲が南に広がること、2基の古墳時代の土壙墓を検出できたこと、多数の土器片と鉄器5本を確認できたことが挙げられる（竹中ほか、2020）。2019-1号墓は、人骨の保存状態はよくないが、再葬の可能性も考えられる。2019-2号墓人骨（女性・壮年）の脳頭蓋は過短頭であることが確認できた。

2020年発掘の調査成果としては、立石、板石堆積群、土器や鉄器を多数、検出できたこと、鉄製三葉環頭柄頭を検出（2020-1号墓 墓壙上）できたこと、4基の古墳時代の土壙墓を検出できたことが挙げられる（竹中ほか、2021）。2020-1号墓は再葬墓であり、人骨（男性・熟年）の保存状態は比較的良好。成川遺跡で確実に再葬墓と断定できる初例である。2020-2号墓人骨（女性・壮年）の脳頭蓋は、やはり過短頭であった。

2021年発掘の成果としては、新たに7基の墓（再葬墓：1基 土壙墓：6基）と古墳時代後期の祭祀跡を検出できた（竹中ほか、2022）。墓は重層的に造られている。墓壙内に、副葬品は遺存していない。調査区の北東側からは、墓前祭祀を行った古墳時代後期の須恵器（高坏）などが納められた土壙が検出された。

われわれは、2022年8月から9月にかけて成川遺跡を再調査した。本稿は、この成川遺跡第4次2022年発掘調査の調査成果速報である。

## 2. 調査成果

第4次2022年調査は、2022年8月19日から9月7日まで行われた。2021年調査時の7トレンチの一部を調査区とした（図2）。前年の発掘で、墓壙と人骨の一部を検出しただけであった2021-5号墓と2021-6号墓、今回新たに検出した2022-1号墓を掘り下げた。今回の調査区内にこれら3つの墓は収まらない（図3）。調査区内で検出できた人骨の部位は、2021-5号墓は頭蓋と体肢の一部、2021-6号墓は下肢の一部、そして2022-1号墓は頭蓋を検出できただけであった（図4・5・6）。3基とも観

察できた墓壙内に、副葬品は遺存していない。今後、埋葬人骨のC14年代測定を行い、墓の造られた年代を解明したい。また、前年に検出された墓前祭祀を行った土器を埋めた土壙の周辺には、墓は存在しないことがわかった。

### 3. おわりに

成川遺跡を営んだ人々は、立石土壙墓という特徴的な埋葬文化を少なくとも数百年持ち続けていた可能性があることが、われわれの調査からもわかる。この南九州の南端の成川の地を、数世代以上にわたって墓地とした成川の人々はどのような人々で、どのように特色ある埋葬文化を形成したのであろうか。過去の成川遺跡の発掘調査成果などとの比較を通し、成川遺跡を営んだ人々の実態解明に努めたい。

今回の調査で、われわれの成川遺跡の発掘調査は終了となる。今後、出土した遺物や遺構、出土人骨等を精査して行く。現在分析中の出土人骨のDNA分析の結果にも期待したい。これらの成果を元に、発掘調査報告書のとりまとめを急ぎたい。

### 謝辞

発掘調査の際、成川集落のみなさまには多数の助言や助力を賜った。また指宿市教育委員会には、調査発掘に関する様々な便宜を図っていただいた。深甚の謝意を表する。

本発掘調査はJSPS 科研費 JP21H00351の助成により行われた。

### 引用文献

- 鹿児島県教育委員会 編 (1983) 成川遺跡. 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書24. 鹿児島県教育委員会.
- 河口貞徳・河野治雄・重久十郎 (1958) 成川弥生式群集墓. 考古学雑誌43:34-42.
- 竹中正巳・大西智和・鐘ヶ江賢二・松崎大嗣・中摩浩太郎・鎌田洋昭・新垣匠 (2020) 成川遺跡第4次発掘調査速報. 鹿児島女子短期大学紀要57:1-2.
- 竹中正巳・大西智和・鐘ヶ江賢二・中村直子・松崎大嗣・中摩浩太郎・鎌田洋昭・新垣匠 (2021) 成川遺跡第4次2020年発掘調査速報. 鹿児島女子短期大学紀要58:1-10.
- 竹中正巳・大西智和・鐘ヶ江賢二・中村直子・松崎大嗣・中摩浩太郎・鎌田洋昭・新垣匠 (2022) 成川遺跡第4次2021年発掘調査速報. 鹿児島女子短期大学紀要59:5-9.
- 田村晃一編 (1974) 成川遺跡. 埋蔵文化財発掘調査報告第7. 文化庁. 吉川弘文館.
- 内藤芳篤 (1985) 南九州およびその離島. 「シンポジウム・国家成立前後の日本人: 古墳時代人骨を中心にして」. 季刊・人類学, 16(3): 34-47.

(2022年11月24日 受領/2022年12月8日 受理)



図1 成川遺跡の遠景



図2 2022年発掘調査区





図3 成川遺跡2021-5号墓, 2021-6号墓および2022-1号墓



図4 成川遺跡2021-5号墓人骨出土状況





図5 成川遺跡2021-6号墓人骨出土状況



図6 成川遺跡2022-1号墓人骨出土状況